

京都大学文学部図書館蔵

『和歌一字抄』について

田野 慎 一

はじめに

『和歌一字抄』は、もともと藤原清輔が編纂した歌学書である。諸伝本の関係については、『新編国歌大観』第五卷(角川書店 昭三〇)に付された「解題」(井上宗雄氏・西村加代子氏執筆。以下「解題」)に詳しい。すなわち、諸伝本は原撰本・中間本・流布本とに大別され、流布本系の諸伝本には定家らの歌が含まれることから(中間本にも定家の歌は含まれるが)、鎌倉中期に今見るような形に増補されたと考えられている。

本稿で取り上げるのは、京都大学文学部図書館が所蔵する『和歌一字抄』の一伝本(以下、京大本)であり、歌数から流布本(増補本)に分類される。

流布本(増補本)について、「解題」は、「すべて上下二巻で、およそ一一七〇首前後の歌数をもつ。書陵部(五三六三)本と川越本とが本文的に近似するというように、幾つかのグループに分けられる可

能性はあるにしても、特に系統分けするほどではない。(後略)と記している。しかし、中村康夫氏の御教示によれば、奥書や歌の入りなどによって、およそ五つのグループに分類可能である。

本稿は、『和歌一字抄』伝本研究の一環として、京大本の書誌的情報を報告しつつ、『新編国歌大観』の底本となった書陵部本(五三六三)以下、書陵部本との比較から窺える、京大本の本文的特徴について言及しようとするものである。

一 書誌

まず、京大本の書誌について略記しておこう。

京都大学文学部図書館における所蔵番号は、「國文學Fg上」。

装訂は、楮紙袋綴上下二冊本。縦三三・三三cm、横三三・三三cm。後表紙は無地薄茶色の厚い紙、原表紙は白地に、波目や井型刷毛引の薄茶色の文様がある。外題は、後表紙の左上に「清輔和歌一字抄第一冊第二冊終」(題簽)とあり、原表紙の中央に「清輔和歌一字抄乾(坤)」「(打ち付け書)とある。内題は、巻首に「和歌一字抄上(下)」。

墨付、上巻六六丁・下巻六五丁。目次部分を除く本文は一面〇行。和歌は一行書。上巻にのみ前遊紙一紙がある。

巻首には、「京都帝國大學図書館」(朱・陽刻)の蔵書印(上下巻巻頭)。下巻原表紙右上に「洪」の朱印(朱書か)がある。また、上巻原裏表紙見返し左下に「浅野氏」、上巻原裏表紙左下に「平民／浅野／久之口(一字判読不能)」と墨書。

総歌数は、上卷六首、下卷五首で、合計二二首。書陵部本と比べて十首少ないが、これは、上卷にちようど一丁分の脱落があることによる。すなわち『新編国歌大観』歌番号 \times \times の十首が欠けているのである。京大本書写者が一丁飛ばして写してしまつたか、あるいは、京大本の親本にすでにこの脱落があつたか、のいずれかであろう。因みに、現存する二十数本の流布本には、この部分の脱落は見られない。この十首の、不注意による脱落を除くと、歌順に異同はあるものの、書陵部本にある歌は、すべて京大本にもあることになる。

上巻前遊紙裏には、

一本云

此抄者清輔朝臣所撰也

近衛院御宇仁平年中抄歟猶可勘也

此本^ニ仁平之後定家等之哥有但裏書歟

……A

……B

(* BはAに比べてやや小書き)

とある。これは少し注意を要する記述である。Aの部分の記述が、同じく増補本に分類される、川越図書館本や樋口芳麻呂氏蔵本、さらには、原撰本の伝後光厳院本(大阪青山短期大学所蔵)や三康図書館本にも見られるからである。⁽¹⁾

京大本は、三種類の奥書を有する。

此抄借左近少將濟俊建筆令

書写之可秘藏之

(一行分空白)

大永二年臘月上澣

桑門^{くわもん}玄句^{げんご}(二で改頁)

……(I)

右此抄者借西三條宰相令書
写之可秘藏也

(一行分空白)

慶長十年卯月上旬

實益^{じやくえき}

……(II)

本云

文明十四年季陽中旬

室町殿^(和名三好)(^{和名三好})尊命披三本用捨之

終數日書功返納畢右其時為中

書令馳退筆者也重可消書之^{云々}

於此本者尤可禁他見而已

……(III)

八座一閑人^一

* (III)の部分、(I)(II)よりも大きめの字

(I)の奥書は、書陵部本にも見える。ただし、書陵部本では、署名が「堯空」(二三条西実隆)となっている。これは書陵部本の方が

正しい。「左近少將濟俊」は、当時、実隆と親しく付き合っていた姉小路（北家小一条家）濟俊で、井上宗雄氏は、濟俊の歌歴をまとめた中で、書陵部本の奥書を示し、

十七歳の太永二年に濟俊は已に清輔の一字抄を写していたのである（因みに、一字抄はこの前年大永元年八月、橘長頼らが、「飛鳥井雅俊本を写した」陶化林忠堯（日俊）本によつて写し（丹鶴本）、また原撰本の内閣本もこの頃（室町後期）の写で、この頃盛んに写されている）。

と述べている。なお、濟俊の祖父、基綱も『和歌一字抄』を自ら書写していたようである。

（Ⅱ）の奥書に見える、「西三條宰相」は、慶長十（一六〇三）年の年記から見て、実隆の玄孫「実條」であろう（『公卿補任』では、当時、実條は、参議従三位で右中将）。「實益」は、西園寺實益（当時、權大納言正二位）で、實益が実條所持本を借りて書写したことが知られる。

（Ⅲ）の本奥書に見える「室町殿」は、文明十四（一四六三）年の年記と「准三宮前左相府」の注記によつて、足利義政を指すことが分かる（『公卿補任』）。義政の命令によつて、三種類の伝本を取捨しながら、新しい書写本の作成が行われた。

なお、神宮文庫所蔵の「和歌一字抄」の下巻奥書には、「清輔朝臣和哥一字抄二帖（元写一帖）希肖珍書也項日／申出室町殿御本密々遂写切華／文明三年三月／黄門郎判」という奥書が見える。文明三（一

四）年当時の「室町殿」も足利義政を指す。

「八座」とは、参議の別称である。『公卿補任』に拠れば、文明十四年当時の参議には、「高倉」永継・「冷泉政爲」・「四辻季經」・「姉小路基綱」・「冷泉爲廣」・「中山宣親」・「小倉季熙」・「橋本公夏」の八人がいる。「八座一閑人」とは、このうちの一人であろうか。ここには、上下冷泉家の政爲・爲廣の他に、先述した基綱の名も見える。

以上、京大本の書誌を確認した。京大本は、書陵部本と共通の祖本を持つようであるが、上巻前遊紙裏に「此抄者く猶可勘也」という記述がある点、「室町殿（義政）」周辺で、『和歌一字抄』の書写が行われたことを示す、「八座一閑人」なる人物の本奥書を伝えている点など、注意してよい一伝本であると言える。

二 歌順・標目・歌題・作者名

書陵部本との比較で分かる京大本の特徴を、歌順・標目・歌題・作者名の点から述べる。

【歌順】 書陵部本と比較した場合の、京大本の歌順の異同を示すと次の通りである。歌番号は『新編国歌大観』に拠る。

- | | | | |
|---|---|---------|--|
| ① | { | 438 | |
| | | 437 | |
| ② | { | 543 | |
| | | 545 | |
| | | 540 | |
| | | 542 | |
| ③ | { | 582 | |
| | | 581 | |
| | | (以上、上巻) | |
| ④ | { | 724 | |
| | | 720 | |
| | | 723 | |
| ⑤ | { | 748 | |
| | | 744 | |
| | | 747 | |

⑩*	{	1001 999 1000	⑥*	{	829 826 828	
⑪*	{	1034 1035 1033	(以上、下巻)	⑦*	{	888 880 883 890 889 886 885 884 887
				⑧*	{	985 978 984
				⑨	{	992 991

「解題」に記されている通り、書陵部本には、「歌や歌題の肩に『一』『二』等の番号のあるところがあり、「本によつて歌順の異なる」とが示されている。書陵部本の歌順注記には一部脱落しているものもあるのだが、*印を付した八例は、概ね書陵部本の歌順注記に沿つた歌順になっている。

⑦は「底本のままでは標目と歌の内容とが対応せず」（「解題」）、⑥も、書陵部本の配列では、

- 825 夕まぐれわびしき風におどろけは
「晚風告秋」
 同
- 826 さきにけり口なし色のをみなへし
「草花告秋」
 源縁
- いはねどしるし秋のけしきは
「同題」
 雅兼卿

827 咲初むる朝の原のをみなへし
 秋をしらする妻にぞ有りける

同一首同座
 顕季卿

828 露むすぶ秋にははやく成りにけり
 浅茅が原のうつろふ見れば

行宗卿

829 ゆふかけていく田の森の涼しきは
 風こそ秋の使なりけれ

（引用は、『新編国歌大観』）

となり、行宗歌が「草花告秋」を承けるかのような歌順であるが、それでは内容的に矛盾してしまう。書陵部本の注記（京大本）のごとく825番歌の次にある方がよい。他にも、②④⑤⑧⑩では、京大本の方が、同題・類題でまとめた形になっている。

②…標目「路」の副項目「径」を含む題詠三首（540〜542）が標目内の最後に置かれる。

④…「見花」を含む題詠二首（724 720）が纏められる。

⑤…「山家待春」題の二首（748 744）が纏められる。

⑧…「毎年見花」題の三首（985 978 979）が纏められる（* 979は「同題」）

⑩…「憶牛女言志」（1032）「七夕言志」（1034）「同」（1035）が纏められる。

書陵部本の歌順注記に沿つた伝本は、京大本だけではないのだが、注意してよい異同である。

ところで、①③⑨⑩は、同類・同題でまとめようとした歌順ではないようである。⑨については、書陵部本の「991 992 997 993 996」のような配列を見せる伝本が多い。書陵部本では、992の歌題肩に「一」の注記があり、997の歌題の注記が脱落したのかもしれない。これなら「花契多春」題二首(992 997)がまとめられた形になる。⑩については、その意図は不明瞭であるが、多くの伝本が京大本と同じ歌順を探る。京大本の歌順は、書陵部本に示された他本の歌順注記に関わる場合が多く、それは、標目や題によってある程度歌順を整えようとした結果であると考えられる。

【標目】

標目目次は、「東」^三、「北」^三などと番号を付し、上下巻の巻頭にそれぞれ掲げられている点、書陵部本と同じである。

標目数は、書陵部本が上・下巻それぞれ「百」・「九十五」に対して、京大本は「百四」・「九十四」と、若干異なっている。書陵部本では「前九」・「夜^{廿五}」・「温照^{四四}」・「未落^{卅一}」となつている項目が、京大本では、「前」^九・「先」^十・「夜」^{廿六}・「暗」^{廿七}・「温」^{三六}・「照」^{三十七}・「未落」^{四十四}・「鮮」^{七十五}と分項され(上巻)、「荒」^{四十一}・「亡」^{四十三}が「荒」^{卅三}と纏められている(下巻)。本文の標目は、書陵部本も京大本も、京大本の標目目次に対応しているので、京大本のほうが一貫している。猶、書陵部本も京大本も本文の標目には番号は付されていない。

その他、標目目次の細かな異同は次に列挙しておく(ただし、標

目番号の異同は除いた)。

- ・ 初^{四十四} (書陵部本) 初^{四十四} (京大本)
 - ・ 稀^{四十七} (書陵部本) 稀^{四十七} (京大本 以上、上巻)
 - ・ 意^{五十六} (書陵部本) 意^{五十五} (京大本 下巻)
- 本文の標目については、
- ・ 涼冷納涼 (書陵部本) 涼^六 (京大本)
 - ・ 白薄 (書陵部本) 白 (京大本 以上、上巻)
 - ・ 望 (書陵部本) 望^四 (京大本)
 - ・ 不令 (書陵部本) 不^乏 (京大本 以上、下巻)
- に異同が見られる。

【歌題】

『新編国歌大観』「解題」の校訂表に拠れば、歌題が校訂されたのは、「郭公不令→郭公不^乏」(99)の一例だけである。書陵部本の歌題部分には、校訂を必要とするほど大きな問題はさほどないように思われる。京大本の歌題は、書陵部本と一致する場合が多いのだが、京大本には誤写と見られるものもある。ただし、注意すべき異同も若干あるので、次に掲げておこう(『新編国歌大観』の本文を掲げ、京大本の表記と、他出資料の表記を付した)。

- 秋花靡風 俊頼
- 451 おく露にしほるだにもあるものを 妙なる萩に秋風ぞ吹く

京大本 「秋花靡風」 * 散木奇歌集 412 「秋花靡風」

860 桜さく春は夜だになかりせば
夜思梅花 能因
夢にも物はおもはざらまし

京大本 「夜思梅花」

*後拾遺98「夜さくらをおもふ」といふ心をよめる、
能因法師集54「夜思桜花」心二首

900 はらの池のあしまにやどる月影は
依月不忘 俊頼

京大本 「依月不忘秋」 *散木奇歌集636「依月不忘秋」

914 にほふことをりをもわかぬ花ならは
依花知春 坂上定成

京大本 「依花惜春」

書陵部本では、歌題の下や歌頭に出典(他出資料)が示されている場合がある。その点を比較すると、書陵部本にある注記が京大本にない場合が十三例あり(京大本の誤写を含む)、逆に、京大本の方に注記がある場合は、六例しかない。

○書陵部本にある出典注記が、京大本で欠けて(誤って)いるもの。

18・73・97・157・159・197・354・358・375・377・465・572・666

○京大本に出典注記があるもの(京大本の出典注記に、作者名と早い時期の他出資料を付した)。

7「裏」(定家拾遺愚草2225)・531「後」(橘成元後拾遺137)

663「金」(藤基俊金葉二154)・885「同」(定家拾遺愚草2437)

886「真書」(定家拾遺愚草2408)・1148「新古」(隆綱新古今922歌頭)

*書陵部本でも京大本でも「後」とある歌の出典が『後拾遺和歌集』である例は多い。

**885は、京大本では886の後に位置する。

なお、出典注記ではないが、718番歌の歌題「山居眺望」の下には「此歌不審歌心如何」という小書の注記がある。

【作者名】

作者名についても、京大本は書陵部本と一致する場合が多いのであるが、書陵部本にある作者名を欠くものが九例ある(213・224・275・521・549・562・615・640・821)。ただし、書陵部本の誤りを訂しうる例も僅かにあるので、次に掲げておこう。この場合、京大本は『新編国歌大観』の校訂本文に等しいことになる。

477 171
ナシ ナシ
ナシ 宮内卿
義忠 京大本

511 ナシ 惠慶
 682 顯 顯季
 724 ナシ 顯季卿
 855 俊僧僧都 俊僧僧都
 1002 橘成光 橘成元

しかし、「解題」の校訂表に見える残りの十一箇所については、書陵部本と同じか、書陵部本に近い本文である。

細かな点だが、「朝臣」と「卿」とが異なっているもの(69)、「卿」の有無(146・222・330・592・720・937・955)などの異同も見られる。その他の細かな異同は列挙しておく(一首前の歌を「同」で承けるものは除いた)。

267 書陵部本 京大本
 ○範永 範家
 467 ○永源 永深
 569 大中臣輔照^{ミナモトノササキ} 大中臣輔照^{ミナモトノササキ}
 578 ○経信 経俊
 628 ○有教母 有放母
 641 関白 関

683 ○顯季卿 顯卿
 744 源能基^{源能基 兵部少輔} 源能基^{源能基 兵部大輔}
 846 ○俊頼 俊実朝臣^{俊実朝臣}
 1021 ○俊綱 俊国
 1028 ○俊頼 俊綱

三 歌本文

最後になつたが、歌本文について触れておく。書陵部本では、歌句が一句以上大きく欠けているものが六首ある。その部分の京大本の本文を先ず確認する。「新編国歌大観」の校訂本文を掲げ、脇に異同を示した。

392 雪埋寒草 俊頼朝臣
 いとどしくしどろにみゆるかるかやの
 うれもとつ葉にふれる白雪

413 遠草漸滋 無名
 しがふべく成りもゆくかなきぎす鳴く
 かたのみののをぎの焼原

書陵部本 ナシ 京大本 ナシ
 書陵部本 ナシ 京大本 しかふへく

同 惠慶

511 影見えて汀にたてるあしたづは

むべししもよを思ふなるべし

書陵部本 ナシ 京大本 たちかを思ふなるへし

行路秋花 顕季卿

545 白菅のまのの萩原さきにけり

行きかふ人の袖ふみまで

書陵部本 ナシ 京大本 霧はれぬ 俊頼朝臣

時鳥留客

603 たがために旅ねをすれば時鳥

またともなかでさよふかすらん

書陵部本 ナシ 京大本 またともなかつて

同 通俊朝臣

859 春なれば 山里に

すめばぞ見つるけさの曙

書陵部本 ナシ 京大本 ナシ

右六首の傍線部分が書陵部本では欠けているのであるが、京大本では、413・511・545・603の四首については、歌句が欠けることなく収められている(書陵部本でも413・603は重出箇所では欠けることなく掲出されている)。

京大本 511の「たちかを思ふなるへし」は墨線の脇に小書きに傍書されている。他出資料では「たちよをおもふなるへし」などである。

京大本 545「霧はれぬ」は、他出資料でも「霧はれぬ」である。いずれも「和歌一字抄」の諸伝本の中でも揺れのある箇所である。

以上の六例を除いて、「解題」の校訂表では、三十二箇所の歌句が取り上げられている。その場合、京大本の本文は、校訂本文と一致する場合が多い。左に歌番号によってその具体を示す。

○書陵部本と京大本とがほぼ一致する例

364・442・621・689・933・980・1028・1085・1124

○京大本が校訂本文にほぼ一致する例

140・184・222・316・349・376・503・555・562・680・699・834・839

○京大本の傍書が校訂本文にほぼ一致する例

878・924・927・1026・1034・1153・1166

732・885

○その他

716

その他、両本の間には細かな異同もあるのだが、ここでは、比較的大きな異同を列挙しておく。

書陵部本 京大本

30 こほるらめ みたるらめ

61 うかへる千世の まかへる千世の

135 一声そなく 一こそそきく

714	雲井にまかふ	雲ゐにみゆる
622	誰我家の	誰わか宿の
572	み山への里	深山辺の空 <small>さきとイ</small>
511	波はみな <small>あしたうはイ</small>	浪はみな <small>なみあしたうはイ</small>
355	去年をへたてぬ	こそを尋ぬ <small>へたてイ</small>
348	有明の空	有明の月 <small>アキイ</small>
283	野へを又みんと	野辺を待らん <small>アキイ</small>
281	あけぬ也	あけぬなり <small>かぬちモイ</small>
270	いく世過ぬと	幾夜過ぬと <small>幾夜</small>
267	けふも咲なむ	今もさかなん
262	良立ぬらん	良たけぬらん <small>ライイ</small>
245	声きけは	音きけは
196	吹まよふ	吹かよふ
165	吹ぬさきにと	たゝぬさきにと

(以上、上巻)

1145	有明の空	有明の月 <small>アキイ</small>	(以上、下巻)
1137	さむへはそへて	さむへはそへて	
1136	あはぬこゆへに	ねなく子ゆへに	
1101	常にけてなけ	つねにきてなけ	
1089	あすのためにや	あすのあやめの	
1030	玉なれば	花なれば <small>玉珠</small>	
877	松のしつえに	松のしつえを	
855	かへる心を	かゝる心を	
844	滝となしけん <small>たらぎ</small>	滝となるらん	
844	せきそめて	堰とめて <small>せき</small>	
754	みゆ斗	見るはかり <small>ゆい</small>	
743	霞と思はん	かすみとやみん	

京大本の歌本文は、傍書を含めて書陵部本と一致する場合が多いのであるが、右例のごとく、比較的大きな異文も存在するのである。このうち、30・61・135・262・270・283・348・355・511・572・754・1030・1089などは、京大本の傍書の方が書陵部本の本文に一致する例である。

り、共通の祖本を持つと思われる書陵部本と京大本との間に、このような関係が見られることは伝本の関係を考える上で重要である。

おわりに

京大本の奥書には、「室町殿(足利義政)・西三條宰相(三条西実條)・(西園寺)實益」といった名も見え、『和歌一字抄』がいかに享受されていたかを具体的に示す資料であると言える。

また、京大本は、大永二年の奥書を有することから、書陵部本とかなり近い関係も予想されるが、特に、歌順・歌本文などについては、少なからぬ異同も存することが確認できた。

京大本が『和歌一字抄』諸伝本群の中で、本文的にかかたる位置を占めているか、など残された問題は少なくないが、その点については、諸伝本の異同を視野に入れた上で、さらに考察していきたい。

〔注〕

- (1) 井上宗雄「原撰本『和歌一字抄』について」(『立教大学日本文学』^四昭五七)、日比野浩信「樋口芳麻呂氏葦葉室頼業筆本『和歌一字抄』翻刻」(『愛知淑徳大学国語国文』二〇平九三)、伊井春樹「伝後光厳院筆『和歌一字抄』の本文」(島津忠夫先生古稀記念論集『日本文学史論』世界思想社 平九)

- (2) 井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町後期改訂新版」(明治書院

平三三五頁。

- (3) 『日本歌学大系』別巻七「和歌一字抄」の解題に、姉小路基綱本の本文書が「本奥書云、以三基綱卿自筆本、聚他毫之寫之。雖三校、定誤多歟。」と紹介されている。

- (4) 義政の子・義尚も、甘露寺親長に「二字抄」を書写させたことが知られる(井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町前期」(改訂新版)『風間書房 昭和五三頁)。

- (5) この時期の「歌書の書写・編述」について、注4の井上氏著書に詳述されている。

- (6) 「たちよをおもふなるへし」：『惠慶法師集』166、『河原院歌合』(大成六甲本)2、「たるよを思なるへし」：『河原院歌合』(大成六乙本)2。『和歌一字抄』の諸伝本では、空白・「△△よを思なるへし」・「や千代を思なるへし」など。

- 「霧はれぬ」：『新統古今和歌集』399、『万代和歌集』833、『夫木和歌抄』414、「歌枕名寄」⁹⁴²⁴(以上いずれも第二句「はなのこはぎ」)。六条修理大夫集²⁸第二句「をののはぎはら」。『和歌一字抄』の諸伝本では、空白・「白菅の」・「霧はれぬ」など。

- 〔付記〕資料の閲覧について御高配・御許可いただいた京都大学文学部図書館に、厚く御礼申し上げます。

—— たの・しんじ、広島国際大学講師 ——